能「飛鳥川」　シテ 大島政允　シテツレ 大島輝久　シテツレ 佐々木多門　ワキ 福王和幸
於 国立能楽堂（2007.6.6　清水一撮影）

シテツレを演じて

大島輝久

能と他の演劇との違いの一つに、役者が分業制である事があげられます。シテ方がワキを演じる事はありませんし、狂言をする事もありません。私共シテ方が舞台で受け持つ役割はシテ、地謡、後見、そしてシテツレです。私は最近舞台でシテツレを勤める事が多くなってきました。その経験の中で解ってきた事、ツレの役割や演じる上での難しさをご説明してみたいと思います。

シテに様々な役があるように、ツレの役も多岐にわたります。主には若い女性、直面の男、姥などで、最初の方に少しだけ出てきてすぐ帰ってしまうものから、シテより長い間舞台にいてずっと座りっぱなし、ひたすら足の痛みに耐える……そんな役もあります。どんな役の時も共通して言える事はツレの分を弁え、あくまでもシテを引き立てながら舞台を盛り上げる意識を持つ事です。かと言って控えすぎてはシテの力になる事は出来ません。この辺りのさじ加減が難しい所であり、経験が必要とされます。

「松風」という曲があります。この曲のツレは、私が経験した中で最も大変な役でした。シテ松風の妹、村雨の役で共に舞台に出たら中入りする事もなく、二時間近くの舞台に立ち続けます。複雑とも言える細やかな節付けの名文句の数々をシテと共に連吟し、能面によって視界を遮られた中で見えないシテと多くの型を合わせなければなりません。しかも最後には足の痺れとも格闘……。

松風のシテは多くの方が「ある意味、道成寺より大変」と言われる程、技術と体力を駆使する大曲ですが、ツレにも先程触れた分を弁えた中での確かな存在感が要求され、曲が終わった後は肉体よりもむしろ精神的な疲れから抜け殻のようになってしまいました。ツレに求められる全ての要素が村雨には込められているように感じました。

能は総合芸術であり、全ての役が高いレベルにあってこそより良い舞台が成立します。今後、舞台をご覧になる際に、シテ程は目立たぬその他多くの役者達がいかに舞台を支えているかにも注目して頂ければ、より能の楽しみは広がるのではないでしょうか。

能おおしま草紙

第16号

（年2回発行）

発行所
喜多流大島能楽堂
〒720-0814
広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633

P.2 喜多流と掃部山のご縁で　出雲康雅
P.4 出来損ないの記　松本薫
P.6 笛と福山　滝沢成実
P.8 お謡と〝つれのうて〟　吉田道弘

喜多流と掃部山のご縁で

喜多流職分
出雲康雅

もう十年も前の事になりましたが、横浜能楽堂の企画で、「皆で謡う高砂」という催しが有りました。約五百人の人を集め、「高砂」のなかから「所は高砂の……」「四海波静にて……」「高砂の尾上の鐘の……」「高砂やこの浦船に……」「げに様々の舞姫の……」この五つの小謡を稽古し、発表会では、受講者の人達約五百人が見所で、我々五人の喜多流の者と囃子方四人が舞台の上で「高砂」一曲を最初から謡ってゆき、稽古をした小謡のところへ来ると見所のお客様一同が我々と一緒に謡うという企画でした。

一度に五百人、それも老・若・男・女・外国人等々で、私ではちょっと無理だとおことわりしましたが、山崎有一郎館長より「君は声が大きいから出来る！」と言われ、しぶしぶこの仕事を受けました。

四回の稽古で五つの小謡を囃子の入った謡（所謂モチ入）で教えるのは大変で、私も少々あせりましたが、カセット・テープも利用し何とか教え込み、申合せへとすすみました。新年一月中の発表で、皆さん思い思いの礼装で「高砂」一番を謡い終えました。参加された皆様は終って後、満足感と興奮状態でなかなか能楽堂から離れがたく、記念写真とかお話等々で、この企画は大成功でした。

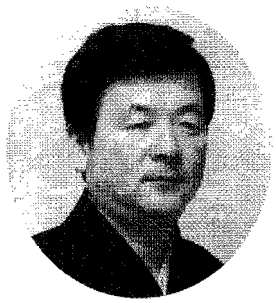
その後三年続きましたが、謡本の版権の事でクレームがつき、やむをえず中止しましたが、大変残念な事です。

この「皆で謡う高砂」に関連した企画で、公共施設では珍しい深夜公演が横浜能楽堂でありました。「カウントダウン能」と称し、一九九九年から二〇〇〇年に渡る新しい世紀を迎えるミレニアムの企画でした。

午後十一時開演で、まず私の素謡「翁」と狂言の秘曲「獅子聟」を山本則俊氏他が演じられました。その後、舞台は休憩とし、能楽堂の扉を開け放ち、横浜ならではの港の船の汽笛を迎え入れ、NHKの司会者、葛西聖司氏の音頭でカウントダウンをして新しい世紀を迎えたのです。新世紀に入り、私は半能「高砂」を勤めさせていただきました。その後、能楽堂ロビーにて、鏡開き、パーティー等で盛りあがりました。

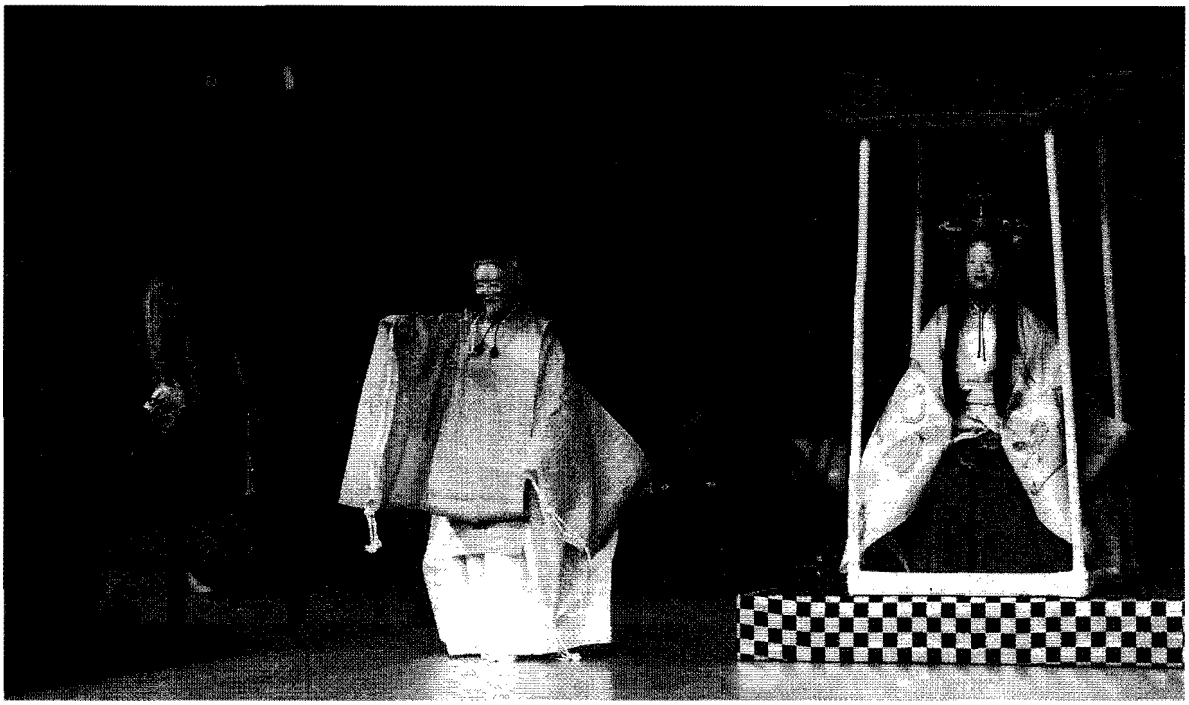
この「カウントダウン能」も深夜にもかかわらず超満員の盛況でした。日頃の大晦日はお酒を飲み、くつろいでもう寝ようかという時間の演能で、夜十一時迄酒も飲まず、緊張した時間を持つという事は初めてで辛い経験でした。

本年一月、横浜能楽堂開館十周年記念企画で、またまた横浜にご縁をいただきました。



出雲康雅（いずもやすまさ）氏

1947年　出雲恒一の次男として広島に生れる。
　　父および15世宗家喜多実に師事
1975年　「猩々乱」を披き同年独立、以後「翁」「道成寺」「望月」
　　「隅田川」等を披く。
　　広島で「喜雲会」、東京・横浜で「出雲会」主宰。
　　東京で「出雲康雅の会」を主宰。
1990年　厳島神社の演能を取り仕切る厳島神社神能執事に就任。
国総合指定重要無形文化財。日本能楽会会員。能楽協会会員。



能「筑摩江」　シテ(御食津の神)出雲康雅　於 横浜能楽堂(2007.1.27　神田佳明撮影)

㊟ シテは作物の中

「江戸大名と能・狂言」という六回のシリーズ、第一回「江戸城の謡初」、第二回「能の保護と統制」、第三回「大名の美意識」、第四回「前田斉泰と能・狂言」、第五回「徳川光國と能」、第六回「井伊直弼　能・狂言」の企画があり、そのシリーズ最後に「筑摩江(つくまえ)」という聞いた事もない能のシテ出演を頼まれました。

井伊直弼は、能・狂言の愛好家で、生涯にただ一曲、能「筑摩江」を作っていたのです。彦根城博物館に井伊直弼の直筆本があり、そのコピーを見せられ、これを能にして欲しいという大変難しい依頼を受けましたが、とても無理だと思い、お断わりしました。しかし井伊家のお抱えは喜多流であったということと、横浜能楽堂が建つ掃部山公園には、彦根藩主で幕末の開港時、大老として重要な役割を担った井伊直弼を顕彰して造られた像が港を一望するように建っているというご縁があり、是非共と懇願され、とうとうお引き受けしました。

渡された資料の中に「未刊謡曲集」という本があり、その中にこの「筑摩江」の事が書いてありました。一九九〇年に高林白牛口二師が節付等をして、素謡として彦根城博物館の能舞台で発表されたという事を知り、その時の謡本を譲り受け、これを使用する事を了解していただきました。

まさに難解な曲で、地謡をお願いする皆さんに難しくて長くて覚えられないと断られました。そこで、早稲田大学教授の竹本幹夫先生にお願いし、クリ、サシ、クセを割愛し、代わりにその内容を要約した短い語りを新たに補い、地謡の人も謡う事を了承してくれました。型も高林師と相談しながらやっと能になりました。

能「筑摩江」は、能「竹生島」に似た作りになっていまして、琵琶湖湖岸の筑摩神社の縁起物です。間狂言に今も伝わる奇祭「鍋冠り祭」が入り、本年一月二七日に大勢の皆様のお力添えのおかげで、一六〇年ぶりに初演されました。

狂言「鬼ヶ宿」井伊さん作も、同じ舞台で茂山千之丞師、あきら師出演で初演されました。

「少年老いやすく学成り難し」とはよく言ったもので、私も今年節目の齢を迎えました。

打てども煽れども、前へは進まなくなりましたが、あと少し頑張って演能活動をしてゆきたいと思っていますので、宜しくお願い致します。

出来損ないの記

大蔵流狂言師
松本　薫

その日、松山空港に降り立った僕は、のんびりと荷物を受け取り、松山駅行きのバスを待っていました。十二月半ばとはいえ、快晴に恵まれた瀬戸内の空気は暖かく、すっかり旅行気分になっていたのです。時刻は、十時三十分過ぎ。お素人会の始まりには、やや遅れますが、僕の出番は、早くても三時頃です。

大島先生のお祝いの会に指名していただいたのが嬉しくて、早めの便で到着し、高揚した気分でした。松山駅前でバスを降りると、すぐにタクシーに乗り込み、行く先を告げました。

「そんなとこ、ありませんよ」と、タクシーの運転手。

「間違えたかなぁ、たしかに市の総合文化センターなんだけど」

「文化センターというのは、ありませんよ」

あまりのもどかしさに、僕は番組を取り出し、「ほら、やっぱり、総合文化センターなんだけど……」と言いながら、その上の文字に我が目を疑いました。

《松江市・・・・・・・》

動顛して座席から飛び出した僕は、駅前ロータリーを突っ走って向い側の歩道へ渡り、あらためて松山駅の駅舎を見上げ、どんなにひっくり返っても、ここが松山であることを確認し、もういちど番組の文字と照らし合わせると、やっぱり僕がいなければならないのは、松江だったのです。

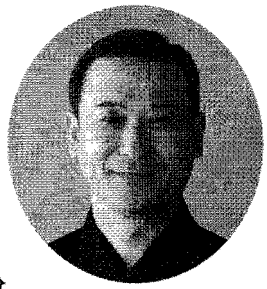
その後の顛末は、焦れば焦るほど遅々として進まない乗物と、晴れ渡った冬の空を刻一刻たゆむことなく西へ傾いてゆく太陽の動きとの記憶が、まるで覚めそうで覚めてくれない悪夢のように、僕の中でせめぎ合っています。

僅かに望みをつないだ、松山～出雲間の飛行機は、廃止されていました。

松山港からジェットフェリーで、対岸の呉へ。そのままタクシーを走らせたのですが、中国山地のなだらかな傾斜にも、液化ガスでまわるエンジンはみるみる減速し、下り坂で加速したかと思えば、また上り坂になり、どこまでも長閑になだらかに続く鮮やかな景色がこんなにも鬱陶しいものかと恨み、はるかに聳えて近付いてくれない大山を呪い、事態の深刻さに頓着もせず話しかけてくる運転手に心の中で悪態つきながら、携帯電話を握りしめていました。

通用口から舞台袖へまわり揚幕が見えた途端、

松本（まつもと）　薫（かおる）氏



十二世 茂山千五郎（現四世 千作）の芸に惚れ、現在で言うところの「追っかけ」をしているうちに入門を決意。
1974年立命館大学在学中に十二世 茂山千五郎（現四世 千作）に入門。
23歳の時、狂言『瓜盗人』のアドで初舞台。以来1988年に『三番三』
1993年に『釣狐』 1996年に『花子』を披く。
海外公演にも多数参加している。
1984年には、同門の網谷正美と丸石やすしと共に「三笑会」を結成。
京都府立文化芸術会館主催の「狂言 勉強会（現在 狂言三笑会）」を自分たちの勉強の場、発表の場として年間５回の公演を催しており、公演回数は100回を既に数えている。
狂言ファン出身ということもあって、常に観客の気持ちを大事に考える姿勢は舞台のみならず、随所で垣間見ることができる。誠実な人柄が反映されてか、舞台に堅さが感じられた時代もあったが、年齢を重ねトレードマークの＜笑い顔＞と共に親近感溢れる舞台でファンの心をつかんでいる。
師 茂山千作を永年の目標としながらも日々、自分自身の狂言を研究、精進を続けている。
能楽協会会員。日本能楽会会員。重要無形文化財総合指定保持者。京都能楽会会員

トメのヒシギが鳴り響いたのです。その場に平伏する僕の頭の上を、

「おぉ、着いたか。幾ら掛かった」

「なんや、間に合うたんかいな」

「いやぁ、夜の楽しみが来よった」

と、様々な声が飛び交い、政允先生の奥様からは、「まぁまぁ、ご苦労をおかけしましたねぇ」とねぎらわれて、あぁ、久見先生にお詫びしたら京都に帰ろうと、面目なさに身を縮めていました。

先生のお姿が見えたのは、鏡の間がしずまって、やや時が過ぎたところでした。

「よう来てくれましたね。私は年寄ってるから福山へ帰りますけど、あなたは宴会に出て下さいよ」

もう、否も応もありません。所在なく、楽屋の隅で片付けを待ち、タクシーに押し込まれるまま宴会場に向かい、促されるまま上座のテーブルに着きました。

本日の出演者（！）が順次壇上に呼ばれ紹介されたとき、僕の番でどれくらい会場が盛り上がったかは、申し上げるまでもないでしょう。

こんな不義理を仕出かしたのに、とても言う資格などないのですが……

僕は、久見先生が好きです。

好き…などという、とりとめなく輪郭の定まらない稚拙な言葉でしか表せないくらい、初めてお目に掛かったときから先生の大きさに包まれている気がしています。

せめて一度は、先生の前でマシな舞台を勤めたいと思いながら、気持はことごとく空まわりして、無慚な結果に終わってしまいました。悔しさでたまらないのですけれど、記憶のどこを探しても、にこにこ笑っておられる久見先生のお顔しか思い浮かびません。

未熟な僕でさえ、先生は同学の士として迎えて下さったのでした。

最後にお目に掛かったのは、入院されていた病院のエレベーター前の踊り場でした。車椅子にはまりこむように小さなおからだになられて、介添えの看護師さんのスプーンから運ばれる煮物を、ゆっくりゆっくり口にしておられました。僕がいることに気が付いておられるのかさえ定かでない、弱々しいお姿に、もうこのまま、おいとました方が良いのだろうかとためらいながら佇んでいると、ふと、こちらに目を移されて、しきりに右手を動かされるのです。

胸が締めつけられる思いでお渡ししたペンで、紙ナプキンにお書きになったことを忘れることが出来ません。

……狂言は、言葉がはっきりしているから、いい。はっきり言わなければ、狂言ではない……

お書きになったあと、指で何度も何度も、その上を叩いておられました。

僕がうなづくと、もういい、というふうに手を振られ、僕はうなだれて先生にお別れをしたのです。

先生の前で、少しはマシなことをしたいだなんて、つまらないことを考えていました。すべきことを、やるかやらないかということだけが、僕の職責だったのだと、いまさらのように思います。

鬼瓦　茂山 千作　松本 薫

笛と福山と

滝沢成実

創作邦楽劇「草戸千軒絵巻」
(2005.11.12)
於 広島県立歴史博物館

滝沢成実(たきざわなるみ) 氏

東京藝術大学楽理科卒業。
一噌流能管を一噌幸政に師事。
能管の他、数種の横笛を吹き、鍵盤ハーモニカやアルパの演奏でステージに立つこともある。
また、海外に出かけて行って笛を吹いてくることから「吟遊奏者」の呼び名もある。
作曲多数。CD「瀬戸内の夜明け組曲」ほか。
さいたま市在住。

毎年秋になると、私は新幹線で四時間の旅をして福山へ行きます。邦楽劇「草戸千軒絵巻」の笛を吹くためです。広島県立歴史博物館に展示されている草戸千軒のセットを舞台に、大勢の子どもたちが中心となって中世の町の様子を再現するこの催しは、毎秋恒例となって早十一年目となります。博物館の展示物を舞台にするとは前代未聞ですが、県立博物館の協力や、博物館友の会の皆様のご尽力により実現しています。朝市の様子や子どもたちの遊ぶ姿、祭りやお月見の行事などが短い時間の中に盛り込まれ、最後は大島文恵さん、紀恵さんの謡と舞に小鼓も入って華やかに締めくくられるこの絵巻、出演は福山市内の小学生と先生、PTAの方々で、毎年違う学校の皆さんが草戸千軒の住人となって往時の楽しい一日を見せてくれます。私も住人として紛れ込んで笛を吹いていますが、元気に動き回る子どもたちが興味津津な顔で横笛を見るので、とてもやりがいがあります。「今年はどんな子どもたちと出会えるのだろう」と、いつも伺うのが楽しみです。

この音楽と動きだけの一場劇を〝絵巻〟と命名したのは大島泰子さんで、企画、構成、演出、衣装デザイン、製作等全てを手がけておられます。そのアイデアとエネルギーには驚かされるばかり！「成実さん、こういう曲作って」とリクエストいただくおかげで、私も今までに様々な笛の曲を作ることができました。住まいのある埼玉と福山の間を何度録音テープと手紙が行き交ったことでしょう。

私が初めて福山を訪ねたのは十年前、平成九年のことでした。大学で同級生だった衣恵さんと二人で小鼓と笛のコンサートをさせていただいたのが最初ですが、その後福山ではいろいろな催しで笛を吹かせて頂いています。

衣恵さんとは東京芸術大学の邦楽科能楽囃子専攻時代に同級生でしたが、私は邦楽科に入る前に同大学の楽理科を卒業しました。西洋クラシック音楽畑の楽理科時代に能管というとんでもない（と思えた）笛と出会い、「これが吹きたい！」と日夜思い続けた末に一噌幸政師に入門が叶って、大学とは関係なく稽古をして頂きました。

能管は西洋クラシックを長年学んできた耳には衝撃的で、なんと不安定な音程、規則性のない奇妙な音階かと驚くことしきりでした。それに普通、楽器は正確な音程を出すことに神経を集中させますが、能の笛は運指が指定されているだけで、ピッチはほとんどどうでもよいのです。……大ショックでした。大切なのは拍子感を出して吹くこと。「能の笛は打楽器のように吹く」との教えにも驚きました。

観世流で謡も始めましたが、やはり最初のうちはどうしても絶対音程で聞こえてしまい、謡本の隅に五線を書いて先生の謡を採譜したりしていました。けれども自分が書き取った通りに謡っても「違う」と言われ、先生の謡も毎回ピッチが微妙に違うので当惑したものです。当初私には謡も笛も、音程をはずして平気でいられるのがスゴイことに思えました。ところがだんだん〝能の音程感覚〟というものが分ってくると、その魅力にはまってしまいました。そしてクラシック用の耳をオフにし、邦楽科への入学を果たしました。

邦楽科で衣恵さんと同期になったことから喜多流大島能楽堂とのご縁をいただき、おかげさまで本当に良い経験をさせて頂いています。台湾では大島政允先生、輝久さん、衣恵さんと共に国立芸術学院の学生を指導する機会もいただきました。能の稽古に打ち込む体力無限の学生達、日本を大好きだと言ってくれる台湾の人々と過ごした日々は忘れられません。また平成十年、リーデンローズの大ホールで行われた大島泰子氏プロデュースの「瀬戸内の夜明け」は、瀬戸内周辺の歴史を音と動きで描く三部構成の大掛かりなものでしたが、出演団体も多かったこの舞台にほとんど出ずっぱりで笛を吹かせて頂きました。後にこの時作った曲を中心に、CDも製作していただいています。そして昨年は「瑞泉寺」（森和子作、大島衣恵節付）という美しい創作能に出会えました。

福山と笛とによってこの十年間に得られた素晴しい人との出会い、作品との出会いは数多く、そのひとつひとつが私の財産となっています。

ニューフィルハーモニックカルテットとの共演（福山ニューキャッスルホテル　1998.12.24）
岡田明子　大島衣恵　木村文人　綾 芳一　滝沢成実　大島泰子　新良貴陽子

お謡と〝つれのうて〟

吉田道弘
（福山喜多会会員　大島社中）

私とお謡との出会いは全くの偶然でした。勤務を終えて福山本通りの本屋に寄った時その本屋の高校の先輩が、これから謡を習いに行くがついてこないかと言う。今詩吟を習おうかと思っていると言ったら、傍にいた先輩のお母さんが、「芸は身を助ける、謡は絶対良いからついて行きなさい」の一言で、二人で行ったところが日本化薬に勤めておられた矢吹安正さんでした。科学者らしく几帳面な理にかなった教え方で、癖のないよい謡を教えていただいたと感謝しています。お稽古の日の私は先輩に負けじと思い切り声を出して謡い、帰りの霞町通りでは「鞍馬天狗」の声が嗄れているくらい謡っていました。二十一歳の時です。

府中へ転勤、福山へ稽古に出るのが無理なので、府中の井本清己さんの家に通い始めました。新市支店に転勤になっても府中へお稽古に通って、孫弟子時代が十数年は続きました。

いよいよ久見先生との出会いは、幸運なことに新市はむかし寺岡病院の院長先生などご友人が七福神とてお謡を習われており、そのうちのお一人のサヌキヤの主人が懐かしい、習いたいとの申し出で、支店の二階の和室で久見先生にお願いしてお得意先さんと行員とでお稽古が始まりました。しかし私が転勤してお世話する者が居なくなり、あえなく消滅。

久見先生にうちに来ないかと声を掛けていただいて、よろしいの

福山喜多会１日史跡めぐり　須磨寺にて（2001.10.８）　筆者　後列左から４番目

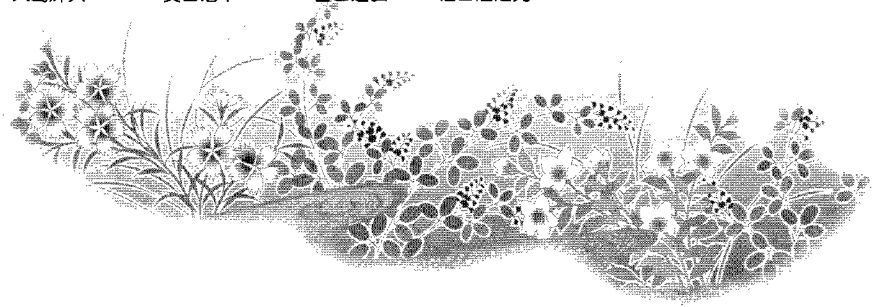
ですかと恐る恐る入門した次第です。口伝でありながらポット先生の声が止んで一人で謡うとき、強吟と和吟を取り違えて冷や汗ものでしたが、いつもいい声だなあと一対一で教えて頂ける幸せを感じていました。

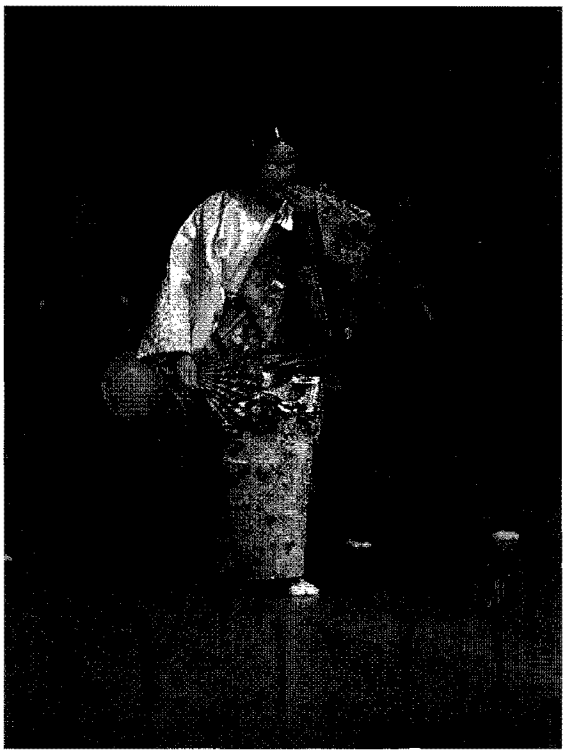
井原支店という毎日通えぬ転勤先で仕事も忙しく九年ほどお謡から離れましたが、定年まで後五、六年となったころ、趣味は生かすべし、芸が身を助けることもあるだろうと再度大島の門をたたいて、今度は政允先生の弟子となって再出発です。お稽古は何時も夜の九時からの最終便です。お謡を一年復習してその後は「めくら蛇におじず」で仕舞を習い始めました。十五年で延べ四十曲余をすでに舞っているのに何時もドキドキしながら舞台に立っています。舞い終わった時のなんともいえぬ良し悪しは別にしたホット感、満足感がまた次なる挑戦へいざなっているように思います。

仕舞や舞囃子の地謡を勤めさせていただくようになって久しいのですが、記憶力の衰えの激しいこの年齢になって、もっと若い頃に口ずさめば謡がすうっと出てくるくらいに謡い込んでおけばよかったのにと、反省すること頻りです。

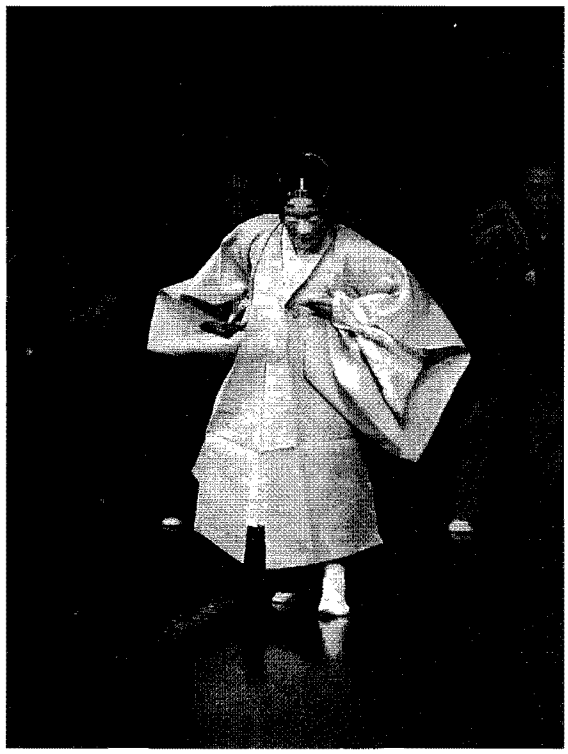
しかし、能の地謡に二、三度と出させて頂いて思う事は、覚えようと五、六十回、謡い込む時に言葉の意味の深さ、言い回しの妙、韻の心地よさに引き込まれて、四百年謡い継がれた伝統芸能の奥深さに改めて、大げさですが命ある限り謡い込み、惚れ込んでみたいと思うこのごろです。「つれのうて」もっと謡い仲間を増やしながら……。

福山喜多会　春の会（1992. 5. 10）
能「敦盛」　シテ 大島輝久　シテツレ 奥田浩平　シテツレ 吉田道弘　ワキ 植田隆之亮

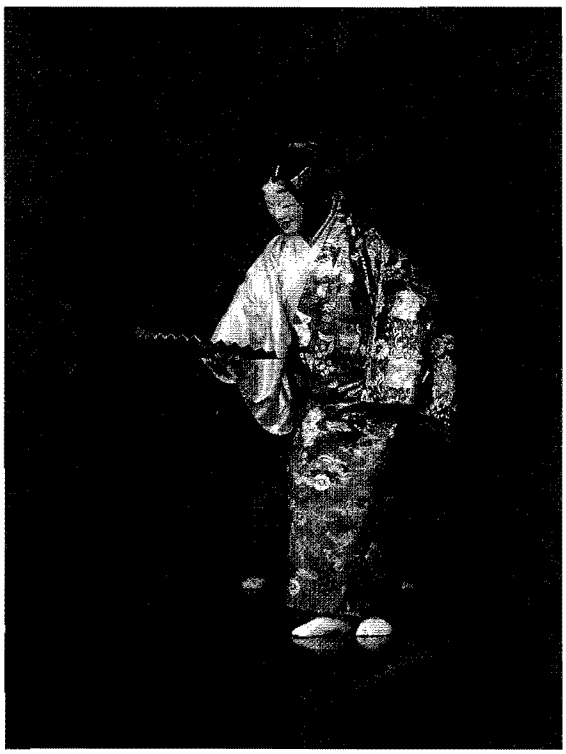




能「飛鳥川」 シテ 大島政允
於 国立能楽堂（2007.6.6 池上嘉治撮影）



能「海人」 シテ 大島衣恵
於 喜多流大島能楽堂（2007.4.15 池上嘉治撮影）



能「班女」 シテ 大島政允
於 喜多流大島能楽堂（2007.6.17 池上嘉治撮影）

能「弱法師」 シテ 大島政允
於 東京喜多能楽堂（2007.5.27 池上嘉治撮影）

第13回 三和の森 光信寺薪能

能「黒塚」 シテ 大島政允　ワキ 江崎金治郎

危ぶまれた三和の森薪能も無事晴天の内に催されました。昨年まで12年間使用した組立て舞台は残念ながら老朽化のためお蔵入りとなり、代わりに回廊を橋ががりとした舞台となりました。満天の星空のもと心地良い爽やかな風にふかれて観る薪能は格別ですね。

子どもの日スペシャル

お能で遊ぼう

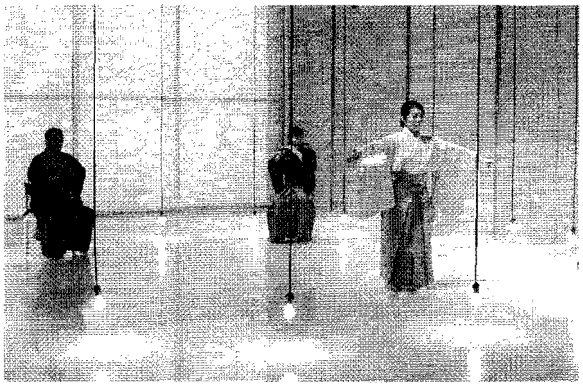
リーデンローズ練習室（2007.5.5）

「お能で遊ぼう！」は、子ども達にとって大変貴重な体験となりました。

参加させていただき、ありがとうございます。

我が家の子ども達は、消極的だった割には「楽しかった」と笑う顔を見ていると、親としても喜びを感じます。

紙芝居もとても分かりやすかったと思います。



光が彩なす交響楽　眞板雅文インスタレーション
〈2006.10.6～2007.3.20 岩手県立美術館〉

コレボレーション企画

「能囃子の夕べ」

2007.3.18
久田舜一郎　滝沢成実　大島衣恵

眞板雅文氏（現代芸術家）は倉敷の大原美術館で個展をなさったご縁で、“花たなばた祭”でも美観地区にある石橋周辺に素敵なオブジェを作られました。その石橋上での衣恵の舞をご覧下さり、岩手県立美術館でのコラボレーション企画が生まれました。

お謡の心に染みる響きは、幼少の頃から馴染ませてあげたいと思いながら、なかなか行動に移せずいました。

「ワンパク相撲」の盛んな土地のように、「チビッコお謡」の盛んな福山……なんてカッコイイなぁ、と思っています。

今、子供達は、気持ち良い体験が少なくなっているので、ぜひ、沢山の子供達に教えてあげて欲しいと思います。

お忙しい中、特別な企画をありがとうございました。　（保護者）

演能ご案内

2007年

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
9月22日(土)	喜多流青年能	12:00	東京喜多能楽堂	一般 4,000円	能「天鼓」 大島輝久
9月28日(金)	能を楽しむ夕べ	17:30	長江小学校体育館	要招待券	能舞「羽衣」 大島衣恵
9月30日(日)	第210回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「敦盛」 松井彬 狂言「佐渡狐」 野村又三郎 能「殺生石」女体 大島政允
10月16日(火)	こころみの会	17:00	梅若能楽学院会館	一般 4,000円	舞囃子「龍田」 大島衣恵
10月21日(日)	福山文化祭秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
11月10日(土)	鞆の浦名舞台 雅の世界	10:00 14:00	沼名前神社能舞台	無料	能学習発表 能楽への道しるべ
11月13日(火)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無料	能学習発表・鑑賞会
11月17日(土)	第18回 ひろしま平和能楽祭	13:00	アステール能舞台	㈱広島信用金庫 要整理券	能「枕慈童」 大島政允 能「野宮」 友枝昭世
11月18日(日)	第211回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「通小町」 大島政允 狂言「千鳥」 茂山茂 能「融」 大島輝久
11月23日(祝)	広島大島会	10:00	アステール能舞台	無料	能・舞囃子・仕舞・素謡

2008年

定期公演　指定席料 2,000円

1月3日(木)	新春能楽祭	12:00	沼名前神社能舞台	無料	奉納「翁」 大島政允
1月20日(日)	親子で楽しむ伝統芸能 お能の魅力にふれてみよう	13:30	喜多流大島能楽堂	国際ソロプチミスト福山 要申し込み	素囃子・能舞「羽衣」
1月27日(日)	喜多流新年初謡会	10:00	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
3月16日(日)	第212回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「歌占」 長田驍 能「葵上」 大島輝久
3月22日(土)	喜多流青年能	12:00	東京喜多能楽堂	一般4,000円	能「通盛」 大島輝久
4月20日(日)	第213回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「桜川」 大島衣恵 能「鵺」白頭 松井彬
5月18日(日)	喜多流春の会	10:00	喜多流大島能楽堂	無料	舞囃子・仕舞・素謡
5月25日(日)	喜多流職分自主公演	11:45	東京喜多能楽堂	一般 6,000円	能「烏頭」 大島政允
7月28日(月)	福山八幡宮薪能	18:30	福山八幡宮	未定	能「翁」 大島政允 野村萬斎
9月21日(日)	第214回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「半部」立花 大島政允 能「白是界」 金子匡一
11月30日(日)	第215回記念 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	お話 馬場あき子 能「卒都婆小町」 大島政允

編集デスクより

大勢の方々のご協力で16号も無事発行できますこと、感謝申し上げます。三女の紀恵が高校を卒業する年に創刊いたしましたので、もう8年前になります。古きを送り、新しきを迎えの激動の8年間でした……（私の立場も嫁から姑に大異変！）　Y. O

喜多流大島能楽堂
〒720-0814 広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633
FAX 084-923-8730
http://www.osimanoh.gr.jp

◆訃報

長年、私方の舞台にお勤め頂いた福王流ワキ方の植田隆之亮先生が七月二十日、逝去されました。お病気療養中と承っていましたが、秋にはお元気になられて、又お舞台を拝見できますことを楽しみにしておりましたのに、あのふくよかな優しい笑顔にもうお目にかかれないのはとても残念です。おおしま草紙三号にご寄稿いただき、そのページを懐かしく拝見しつつ、ご冥福をお祈りいたします。

◆小謡「悲鐘」

昭和二一年頃、恩師 故・村上正名先生は広島市の文化財調査で訪れられた牛田の不動院で、国の重要文化財の鐘の拓本をおとりになりました。その拓本によせて被爆地広島と鐘のことを詠まれた和歌五編を遺されています。その和歌をもとに作りました小謡です。五月十一日、広島県民文化センターでの東京芸術大学のコンサートで娘達三人で初披露いたし、さる八月二九日、不動院にて広島大島会、中国新聞文化教室の有志の方々と共に奉納させて頂きました。